

EFL の授業における教授言語（日本語・英語）の影響

安西 弥生

教育テスト研究センター・青山学院大学

抄録

近年、社会の国際化に伴い、教授言語としての英語(EMI)に関心が高まっている。このトレンドは世界的な動きであるが、日本では授業を英語で行うことで、日本人留学生を増やし、また海外からも日本への留学生を増加させ、グローバルな人材を育成することを目指している。教育現場では政府の教育のグローバル化の方針に従い、英語による専門科目や英語科目いわゆる English as a Foreign Language (EFL)が英語を使い授業が行われることが多くなってきている。しかし、実証的な研究はまだ十分にされていない。そこで本稿では、EFL の授業で日本人英語教員が、教授言語を英語もしくは日本語にすると、教員の英語の印象はどのように影響を受けるのかを明らかにするために実証実験を行った。その結果、学習者は教授言語が日本語よりも英語のほうが、教員の英語を快い英語で、頭脳労働者の英語だと感じる傾向があることがわかった。

キーワード：外国語としての英語(EFL)、教授言語、教授言語としての英語(EMI)、リングフランカとしての英語(ELF)

1. はじめに

近年、教授言語としての英語(EMI)への関心が世界的に高まり活発化している(Ota, 2011; Coleman, 2006)。Dearden (2015)はEMIを、母語が(L1)が英語でない特定の国や地域において、英語で学術的な教科を教えることと定義している。Deardenは、グローバルな調査を行い、EMIは世界的な動向であること、急速に広がっていること、また例外もあるが、多くのEMIは政府の支援の下に行われていること、世論としてはEMIに必ずしも支持しているわけではないが、反対と言うよりは、議論を巻き起こしている状況であること、EMIは教育にアクセスしやすい層とそうでない層とに社会を分断する可能性があることやEMIによるアイデンティティの喪失の危惧があることを明らかにしている。

日本では、文部科学省の「グローバル30」や「スーパーグローバル大学創世支援」により、EMIが大学の評価の対象となっているので、大学のカリキュラムに取り入れる大学も増えている。EMIで授業を行うと、日本人の英語力をあげて「グローバル人材」を育成と、英語で学んで学位を取得できる環境を整えることでより多くの留学生の増加が期待できるという利点があげられている(森住, 2015)。現在、EMIの取り組みは英語科目だけでなく、プログラミングや経済など様々な分野で行われており、グローバル社会に対応するための教育形態のひとつといえる。日本でEMIを実践すると、日本人教員と学生は、外国語としての英語でお互いがコミュニケーションをするので、英語がリングフランカ(ELF)として機能している。研究としては、英語を学ぶ態度や学習者自身の第二言語に対する理想とする姿が、EMIの内的な動機付けに大きく影響をする(Kojima and Yashima, 2017)などの知見があるが、教育方針と実践が先行し、EMIがどのような学習効果をもたらすのか、また学習者

にどのような影響を与えるのか、まだ十分な実証検証が行われていない。

そこで本研究では、教授言語を日本語と英語にするのでは、EFLの授業を行う教員の英語の印象にどのような影響があるのか明らかにすることを目的に実験を行った。

2. 方法

本研究の実験は2017年秋に実験室環境で行った。参加者は60名の大学生で、統制群30名、実験群30名の群に分けた。実験用のビデオは、約5分の「EFLの授業」で、同じ内容の教材で教授言語を日本語と英語で行った。教員はどちらも同じ人物で同じ服装で同じ日に収録を行った。最初に両群共に英語力テストを実施した。その結果、統制群と実験群には英語力に統計的な有意差がないことがわかった。次に英会話のビデオを視聴し、日本人英語教員の英語の印象をMulac (1976)が開発したSpeech dialect attitudinal scale (SDAS)を使い、アンケートに回答した。SDASは、社会的知的地位、美しさ、ダイナミズムの三因子からなる12項目の尺度で、アメリカンイングリッシュの方言の印象を測る評価ツールである。

3. 結果

各質問項目について一要因分散分析の結果を表1にまとめた。検証の結果、項目2（嫌な --- 快い）と項目8（肉体労働者 --- 頭脳労働者）に有意傾向が認められた。項目2では、日本語群の平均が2.17、標準偏差が.95、英語群の平均が2.63、標準偏差1.00、 $p=.07$ で、英語群が日本語群よりも有意に高い傾向が認められた。もう一方の項目8では、日本語群の平均が4.83、標準偏差が1.09、英語群の平均が5.43、標準偏差が1.50、 $p=.08$ で、英語群が日本語群よりも高い傾向が認められた。なお、項目1、項目3、項目4、項目5、項目6、項目7、項目9、項目10、項目11、項目12、項目13では、有意差は認められなかった。従って、SDASで測定した結果、実験参加者は英語で英会話の授業を行ったほうが、日本語で英会話の授業を行うよりも、「快い」と感じ、また「頭脳労働者」の英語だと認識する傾向があることがわかった。結果をまとめたのが、表1である。

表1. 教授言語がSDASの各項目に及ぼす影響

項目	教授言語	平均	SD	有意差
1. 気難しい --- 優しい	日本語	1.63	.718	
	英語	1.97	.964	
2. 嫌な --- 快い	日本語	2.17	.95	
	英語	2.63	1.00	
3. 冷たい --- 温かい	日本語	6.03	.76	
	英語	5.70	1.26	
4. 非友好的な --- 友好的な	日本語	2.00	.79	
	英語	2.03	.93	
5. 好ましくない --- 好ましい	日本語	5.40	1.50	
	英語	5.07	1.62	
6. 貧乏 --- 金持ち	日本語	3.17	.87	
	英語	3.13	1.31	

7. 低学歴 --- 高学歴	日本語	4.20	1.27	
	英語	4.73	1.55	<i>n.s.</i>
8. 肉体労働者 --- 頭脳労働者	日本語	4.83	1.09	
	英語	5.43	1.50	<i>f.</i>
9. 社会的地位が低い --- 社会的地位が高い	日本語	3.47	.94	
	英語	3.17	1.42	<i>n.s.</i>
10. 非攻撃的な --- 攻撃的な	日本語	5.97	.17	
	英語	5.87	.20	<i>n.s.</i>
11. 受動的な --- 行動的な	日本語	3.67	1.27	
	英語	3.57	1.48	<i>n.s.</i>
12. 弱い --- 強い	日本語	4.17	.91	
	英語	4.20	1:16	<i>n.s.</i>
13. 穏やかな --- うるさい	日本語	5.13	1.33	
	英語	5.63	1.56	<i>n.s.</i>

4. 考察と結論

近年、大学のカリキュラムで、一般英語科目の授業をできるだけ英語で行うことが望まれている。しかし教授言語を英語にして英語授業を行うことは、日本人英語教員にも、英語学習者にもストレスがかかる可能性がある。英語教員にとっては、英語ですべてを説明し授業を運営しなくてはならないこと、学習者にとっても、授業内容を完全に理解できない状況で授業が進行していくことも考えられる。しかし本研究の結果からは、学生は、EFLの授業で、教授言語が英語でも日本語でも、教員の英語の印象は全体的にあまり差がなく、教員の英語を「嫌だ」よりも「快い」、「肉体労働者」よりも「頭脳労働者」だという印象を受ける傾向があることが明らかになった。日本人教員も英語でEFLの授業を積極的にチャレンジしてよいのではないかと考えられる。

なお、本研究は実験室実験の環境で行われたので、90分の英語の授業ではどのような影響が見られるのか、更なる検証が必要である。

謝辞

本研究は、2017年10月に、教育テスト研究センターの支援を得て、実施しました。教育テスト研究センターの関係者の皆様に深く感謝いたします。

参考文献

- Colleman, J. (2006). English -medium teaching in European higher education. *Language Teaching*, 39(1), 1-14.
- Dearden, Julie. (2014). English as a Medium of Instruction: A growing global Phenomenon. Retrieved January, 2016, from <http://www.education.ox.ac.uk/crdemi-oxford/emi-research/>
- Kojima, N. and Yashima, T. (2017). Motivation in English Medium Instruction Classrooms from the perspective of self-determination theory and the ideal self. *JACET Journal* 61, 61, 23-39.
- 森住 史(2015) 日本におけるEMI：現状と課題, 教育研究, (57), 119-128, 国際基督教大学
- Mulac, T. (1976). Assessment and application of the revised speech dialect attitudinal scale, *Communication Monographs*, 43 (3), 238-245.
- Ota, H. (2011). University internationalization trends and Japan's challenges and prospects: An East Asian comparative study. *Journal of Multimedia Education Research*, 8(1), S1-S12.